

實際家本位の記述汗なるが如く察せらるゝ點に於て、本書の特質を發揮すると同時に、學者より見て慷慨ならざるものあるを免れざるべし。されど一般的に平易に概説せる點に於て大方に適するものたるべしと思惟せらる。

●G. D. Knox, *Engineering*. London, 1915. ¥ 1.95

著者が先に公刊せる *All about Engineering* 及び *All about Electric City* の如く、本書も亦一般通俗の讀みものとしてのもせるもの。本書の取扱へる事項は、英國マンチェスター運河最初の開鑿、パナマ運河を始めとして、或は灌溉、水門工事に、或は橋梁工事に、或は鐵道及墜道工事に於て、其途行上何如に辛苦艱難を嘗めつゝ人類が自然を征服せんことをかを述べ、事業中に表はれたる小説的說話を配して讀者の興味を喚起せしめんと努むるの跡歴然たるものあり。其他、金銀、ダイヤモンド等の鑛山、船舶と救助に就き、或は燈臺の建設、港灣の建設、動力、電信電話、道路に至るまで、從來工作上の大問題とせられたるもの多くを採り來りて叙上の筆鋒により、一々之を説述し、更に歐洲戰中に現はれたる大工事を附説せり。

人類が自然を利用し、自然を征服せる方面の人文地理學上の參考として採るべき點甚だ少からず、専門學術的ならざるは固よりなれど取扱はれたる事項が理論的にして、然も奇抜にして、不可思

議なる記述の態度誇張的なるが如くにして著實、行文平易にして興味あるが故に、特に中等教師の好説話資料として推奨すと欲するものなり。〔以上同〕

●Homer B. Hulbert, *Japan and Isothermal*

Empire (Journal of Race Development April

1916)

こは本號研究欄「ジャバの氣候と住民生活」の題下に石橋氏も附説せる所であるが、氣候と人文との關係を論ぜる Huntington の「文明と氣候」の後に發表せられたるもの、一で、國家發展の方向に關する新學説と見ることが出来る。即ち史を按ずるに、永久に榮ゆる國家は等溫線内即ち東西に亘る地域であらねばならぬといふ法則を示して居るといふやうなことから説き起して、其例としてはアツシリアもバビロニアもホエニキアもギリシアもローマ乃至サラセンも東西に擴がつて居た、而して其等の國々が故郷の緯度から脱して南又ば北に向つて野心を起すに危險を導いて遂に滅亡するに至る。之れ東西は氣候が一致して居る結果で、領土が氣溫の差の大なる南北に擴張せらるゝと永續し難いものである。現在の強國の有様を見るに露西亞は東西に六十哩も延びて居る、同緯度膨脹國の好例である、而して英國の眞の殖民地はニューゼーランド、アウストラリア、葡アフリカ、カナダ等同溫の地方であつて、

印度、埃及海峽殖民地等は本國と氣候を異にして居るから眞の領土とすべきものでない、又各國の内亂を見るに、多くは其國內の北と南との争であるが、之も氣候の一致しないのが一因である。

日本は現今は世界の強國中唯一の不等温國であるけれども、此國が南北に膨脹したのは極めて最近のことであつて、歴史上永い間殆んど同緯度にあつた。又今後も此法則に滿れないで、必ず東西に其勢力を延ばすに至らん、現に此國民は西方朝鮮を取りて盛んに滿洲、支那に鋒を向け、東は遙く我がカリフォルニアまで發展しつつあり。此滿洲支那の方面へは種々の事情に由り充分に延びることが出来ないかも知れぬが、北米の太平洋沿岸の如きは日本人の侵入に最も都合の好い土地であるから、大いに警戒すべきである云々、さて等温強國説を基として日本の東進の恐るべきを論じて居る。從來此種の問題を取扱へるものには Control of tropics 及び Social evolution の著者 Benjamin Kidd 氏等がある、氏の如きは本論文の趣旨とは寧ろ正反對で、一國の強盛は一に熱帯地方を領有するに在りさまで云つたことがある、何れも自説に都合のよいやうな例證のみを挙げ、論旨も聊か牽強の嫌があつて、全く首肯することは出来ないが、此等を相對立させて見るに興味がないでもなく、又ハンチントンといひ此のハルバーといひ、氣候と人文の問題に日本を對象とするものが多くなつたのは注意すべきことである。(田中)

●古蹟調査之榮

熊本縣教育會

本書は昨年十月、熊本縣教育會が、同縣に於て史蹟調査保存の事業に着手しつゝあるを機として、一般に史蹟の概念を興へ、其の事業に便にせんが爲に縣の史蹟調査委員諸氏に囑托して編纂せしめたるものなり。ホケット形百八十四頁の小冊子なるが、第一章石器時代の遺物遺蹟、第二章古墳の形式と其の遺物より、一般墳墓の沿革、葬儀の變遷、塔の形式、神社と其の建築の沿革、古寺堂、佛像彫刻の様式、古城址等の遺蹟を記し、神話傳説の解釋、天然記念物に亘る諸方面の概論を載せ、なほ卷末には十枚の遺蹟遺物の寫眞版を附して本文との對照に供へたる頗る便利なる書なり。さて是等記事の半は國史大辭典其他二三の書より採萃せるものに係り他の部分に就ても事項に依りて筆者を異にせるを以て、精粗必ずしも一ならず、其の記事の如きまた専門的見地よりせば多少の議すべきあるも、大體採擇配列の當を得、殊に實例として挙げたる遺蹟遺物は主として縣下のものなるは此の書の性質上適當なる事にて之に依り本書の目的は充分達せらるべし。而して其の同縣に最も多き一種の彫刻ある古墳を一括して記して、之を圖示せるは一般研究者にとりても興味を惹くこと少なからず。たゞ附圖の遺物の或物が正確を缺けるは此の書の缺點なるべきか。近年我國各府縣に於いて史蹟保存の調査の行はるゝ所少なからざるが、斯くの